

「岸田総理が核共有を否定しても現実には脅威に囲まれている。  
政治家の務めとは何か？」

令和4年3月8日

●経済安全保障さんからの質問

3月2日、参院予算委員会において、岸田総理は米国の核兵器を自国領土内に配備して共有運用する、いわゆる、核共有については、政府として議論する事は考えていない。非核三原則を堅持する立場や原子力を平和利用を想定している原子力基本法をはじめとする法体系から考えても、認める事は難しいと述べました。核共有の議論を巡っては、菅前総理を中心に持つべきかどうかの議論を始めるべきだという声が上がっています。西田先生の見解を伺います。

●西田昌司の答え

岸田総理の岸田家は（原爆で被爆した）広島の一族ですし、核の話題になると岸田総理は殊更議論を避ける傾向があるように見えます。

安倍元総理は、派閥の総会において、核シェアリングについて「思考停止に陥ることなく議論すべき」といったことをおっしゃいましたし、私も全く同感ですが、そんな安倍元総理も総理時代は岸田総理と同じような構えでした。

岸田総理も、心の中では核シェアリングの議論が必要と感じているかもしれませんが、たとえそうであっても、党内の空気がそれを阻むようであれば、議論もできません。安倍元総理が今になって核シェアリングについての議論をしようと切り出しているのは、党内の空気を変えることで、岸田総理の背中を推したいとの思いがあるのでしょうか。

安倍元総理が財政政策検討本部の最高顧問を務められているのも、積極財政の方向へ党を誘導して、岸田総理に積極財政の選択肢を与えているのです。

非核三原則が綺麗事であることは多くの人が感じているでしょうし、非核三原則を錦の御旗にして国防から目を背けるなど、思考停止に他なりません。しかし、日本はアメリカの核の傘に守られているとの幻想を抱く日本人もまた沢山いますし、「戦争反対」「核兵器廃絶」といった非戦の思考に凝り固まった人々も大量に存在します。

確かに、世界中が平和で核兵器のない時代が到来したら素晴らしいですが、残念ながら核兵器は多量に存在していますし、日本は核保有国に囲まれています。領土的野心を剥き出しにする中国、ウクライナ戦争の最中でもミサイル発射訓練に余念がない北朝鮮等、日本の現実是非常に厳しいのです。そのような状況下で非核三原則を固持したところで、何の意味もありません。

ウクライナは、核を放棄させられ、(NATO に加盟しておらずに)核シェアリングもしていなかったがために、ロシアに侵攻されています。もしもウクライナが核の力を背景にしていたら、ロシアは簡単に侵攻することはできなかったはずで、プーチンは、ウクライナが NATO に加盟をすると、核の脅威が目の前に迫ってくるのを十分に理解していましたから、アメリカのウクライナ NATO 加盟工作に徹底的に抗ってきました。それが世界の現実ですし、(現実的な問題を如何にして解決するかを考えるのが使命である)政治家は、核武装をも含めて議論をすべきなのは当然です。

見たくない現実からは目を背けるといふ、戦後日本人の思考パターンから脱却しない限り、日本に平和は訪れません。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>